

TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー 第38回名作の舞台裏「時は立ちどまらない」
- 公開セミナー 第39回名作の舞台裏「坂の上の雲」
- 阪神・淡路大震災と関連番組を視聴する会を開催
- 岩合光昭写真展「どうぶつ家族」&特別上映会「岩合光昭の世界ネコ歩き」
- 平成27年度事業計画・収支予算を決定

■公開セミナー 第38回名作の舞台裏「時は立ちどまらない」

1月24日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催。今回は、2014年2月にテレビ朝日で放送された、山田太一オリジナル脚本によるスペシャルドラマ『時は立ちどまらない』を取り上げた。この作品は、東日本大震災後の2つの家族の崩壊と再生を静かに描いた感動作として高い評価を受け、数々の賞を受賞した。

[登壇者] 中井貴一(出演) 山田太一(脚本)
堀川とんこう(演出) 内山聖子(制作)
[司会] 渡辺紘史(放送人の会)

一番印象深かった事は何かという問いに、内山氏は「東北にシナリオハンティングに行き、そこに生きる人達の思い出話を伺った。山田先生が、震災の話ではなく、その方々の少年時代の話、いじめの話などを、一生懸命メモを取っていたのが印象的だった。」と振り返った。山田氏がメモを取った、ヤギの乳を飲まされたいじめの話は、ドラマの中に少年時代のエピソードとして使用されている。中井氏は「震災後、役者という商売は何が出来るのか考えた。歌手はギター一本持って被災地に行って歌を歌う事によって元気付けられる。お笑いの人は漫才をする事で笑いを与えられる。このドラマの話を取った時に、傍から見た震災を演ずる事ではなく、震災に遭った人間の本当の日常を演ずる事、自分達が出来るのはこれしかないと思った。」と当時の気持ちを語った。堀川氏は「初日に豪華キャスト全員が揃うトップ



中井 貴一

シーンを撮った。あれだけ長いシーンを一つのシーンにまとめるのは難しかったが、これからやるぞというわくわく感が強烈だった。」と懐かしんだ。続いて、山田氏から「震災は凄い事だった。その震災の話を書いて、ドキュメンタリーに敵う訳がないと思った。ふと頭を冷やしてみると、ドキュメンタリーにはマイナスは書けない。ネガティブな部分も含めた人間の物語を書けるのは、結局の所ドラマしかないと思った。演じる中井さんには非常に抵抗があったと思う。『津波に遭ったと言えば何でも許されるのか、そう



山田 太一

そう人の身になれるか』、そんなセリフはドラマでさえ普通には言えない。でも、そこがないとどうしても綺麗事になってしまう気がする。橋爪功さんの『ハグしたい』もドキュメンタリーでは言えない。だが、妻子を失って凄く孤独、酒は飲めない。そりゃあ誰かをハグしたくなる。」とこのドラマを生み出した原点が語られた。

内山氏が「山田先生から<二つの家族>というキーワードを頂いた。3・11をフィクションとして起こすためには放送局として勇気と覚悟もある。震災から3年経った時に山田さんの筆で、震災をテーマというより、震災に触れるホームドラマという事であれば、テレビ朝日としては自信をもって作れると判断した。」と説明した。<二つの家族>というテーマでキャスティングが始まり、主要キャストが決まっていた。中井氏は、1983年の『ふぞろいの林檎たち』から、節目々で山田氏の脚本に出演している。中井氏は「『ふぞろいの』のメンバーは皆、山田学校を出ていると思っている。本当に色々なものを教えて頂いた。今回は、なるべく何もしないでその地方の人を生きられるかどうかという事を、50代の中の自分と山田先生の向き合い方の一つの課題にした。」と語った。



内山 聖子

このドラマの内容について、堀川氏が「山田さんの本は、案外危ない部分を含んでいる。今回のこの話も『絆とか思いやりというのは本当に無条件に美しいの?』と指摘している。」と言うと、山田氏が「被害に遭わなかった家、中井さんのあの時の気持ちは私のもでもあった。出来る事は何でもやります、私たちに何かさせて下さいという気持ちはとてもよくわかる。それが貰う側になると、助ける側の自分本位の善意に気が済まない。何かしないと気が済まないと言うから、俺達に比べれば一部屋壊すくらい何だと暴れてしまう、そういうシーンを書けば両方のバランスが取れると思った。」と続けた。更に、中井氏が「関東圏などに

居ると、東北全体が地震に遭ったと思うが、それだけ被害の格差があるという事は考えてもみなかった。同じ地域にいながらこの格差を乗り越えていったという話を言うために、このセリフは大事なセリフなんだと自分に言い聞かせないと云えないセリフばかりだった。」と振り返った。

中井さんと柳葉敏郎さんの喧嘩のシーンについて、山田氏は「脚本は殴り合いと書いたが、“つねる”にした事に尊敬した。」と言うと、堀川氏が「あれは中井さんのアイデア。私も殴り合いのつもりで現場に殺陣師も呼んでいた。」と明かした。中井氏は「このドラマでは、リアリティの捉え方を大事にした。普段の生活の中で2人で殴り合いをしている喧嘩はあまり見たことがない。



柳葉さんと、この2人の関係性が子供のいじめられた時に戻ったらどんな喧嘩になるかと考え、『わりとつねるね』という話になった。」と振り返った。

『時は立ちどまらない』というタイトルについて、山田氏は「あの時、あの日から時が止まっていたと言う方もいる。でも、時は立ちどまりません。一年経てば一年経ってしまう。内山さん達は『えっ、こんなタイトル?』と思われたようだが、僕は、時は立ちどまらない、幸福も絶望もそのままにいる事はないと思っている。そういう気持ちが

あったのでこのタイトルで良いと思った。」と語った。

山田氏の脚本について、中井氏が「山田先生の本の凄さは、無駄なセリフがたくさんある事。本来、人間の会話は無駄で成立している。このドラマの中で感心したセリフは、柳葉さんが『そこでだじっちゃん』と言うと、橋爪さんが『どこだ』って言う。これは普通は台本にならない。何故『どこだ』が出てくるのだと。但し、会話のテンポとしてその無駄が成立していく。」と語った。

堀川氏と内山氏が「中井さんを中心としてキャスティングをして良いチームワークが出来た。」と話す中、中井氏は「芝居でコミュニケーショ



ンがとれる俳優が集った時に良い作品が生まれる。何もセリフを言わなくても触らなくても感覚が出る。そういうキャスティングを内山さんがしてくれたお蔭。」と返した。山田氏、中井氏、堀川氏、内山氏の強い信頼関係があったからこそ生まれたドラマである事を強く感じるセミナーであった。

■公開セミナー 第39回名作の舞台裏「坂の上の雲」

2月11日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催。今回は、司馬遼太郎が10年の歳月をかけて書き上げた原作を、NHKが壮大なスケールで映像化したスペシャルドラマ『坂の上の雲』を取り上げた。事前に1700名を超える応募があり、放送終了後4年を経てもなお、同作への関心の高さが伺えた。

[登壇者] 竹下景子 (出演) 藤本隆宏 (出演)
西村与志木 (制作) 柴田岳志 (演出)
[司 会] 渡辺紘史 (放送人の会)

原作『坂の上の雲』との出会いを西村氏は「大学生の時に、学園紛争のために田舎に帰っていた。何もする事なかった私を見かねて、父親が『この本を読み』と勧めてきたのが『坂の上の雲』だった。」と振り返った。映像化の経緯については「司馬さんが生前に(映像化については)ノーであると言っていて、いわば金庫に入れて鍵をかけてしまったような状態になっていた。当時の世界情勢や、国内情勢を考慮すると、ご自身の意に反して伝わってしまうと考えられたのかもしれない。司馬さんがお亡くなりになって3

年ほど経った時、奥様の福田みどりさんに初めてお会いする機会があった。そこで、本を父親から勧められた話と、原作に対する熱意を伝え、『坂の上の雲』をテレビドラマとしてやってみたい旨を恐る恐る申し上げた。その時、明確に



ノーと言われなかったので、ひょっとすると実現の可能性が少しはあるのでは?と感じた。その後、色んないきさつがあり、最終的に司馬遼太郎記念財団に映像化の了解を貰った。」とのエピソードを明かした。



動き出した壮大なプロジェクトについて、柴田氏は「脚本だけでも5年ぐらいかかっている。ロケ地は日本で23都道府県、世界だと10か国にも及ぶので、ロケハンにはさらに多いと思う。『エキストラの人数は気にしなくていい、使いたいだけ使え』と言われた事も

あった。内容重視でとことん追求しようという事にかけては、凄く貴重な番組だったと思っている。」と説明した。西村氏も「大河の10倍くらいの費用がかかっていた。しかし本を作るプロセスの中で相当に絞り込んだ。全体としてはもの凄く費用がかかっているが、その反面、もの凄く計算し抜いて作ったと思っている。それは演出家にとっては厳しい条件だったかもしれない。」と付け加えた。

主要キャストが発表されたのが2007年。秋山好古・真之兄弟の母・貞を演じた竹下氏は、役作りについて「2人の息子が日本を支える立派な人になっていく訳だが、母親としては自分の子どもが、いつまでも健やかに育って欲しいと思うのが心情だろうと。



竹下 景子

お国のために役立てという大きな建前とは別に、いつも無事を祈る母親という事を念頭に演じた。」と明かした。「元気で帰ってきてくれて、家にいる間はホッとして英気を養い、そして元気にまた務めを果たして貰えるように送り出すという家庭作り。じっと無事を祈る女性たちもその時代にいた。」と女性からの視点で解説を加えた。

「主役は男だが、陰の主役は女性だ。」と漏らした藤本氏は、広瀬武夫を演じたこの『坂の上の雲』が、初めてのテレビドラマ出演であった。「クランクインの日に、テレビで見ている名優と言われている方々が目の前にいた。その中に新人の私がぽつんと入って、撮影が始まった。頭が真っ白になってセリフがとんでしまった。」と振り返った。柴田氏が「藤本さんの撮影初日は、餅食い競争のシーンだった。普通リハーサルでは、食べる真似だけですが…、そうしないと本番でお餅が食べられなくなる。ところが、藤本さんは最初からどんどん食べちゃって。」と撮影裏話を明かした。竹下氏も「私もお餅を作るのが忙しかった。」と付け加えると、会場は笑いに包まれた。



藤本 隆宏

海外ロケのエピソードから派生し、話は次第にロケ地の種明かしへと移った。西村氏は「日本海海戦のシーンはロシア側がマルタ島で、日本側は加賀市で撮っている。対馬沖ではない(笑)。真之が松山から上京し、新橋に着いたシーンは上海、横浜港のシーンは実際には熊本で撮影した。203高地は、山を登るシーンが函館で、要塞のシーンはラトビア。」と明かした。続けて柴田氏が「ひとえに準備のたまもの。長い準備期間によって、それだけばらばらに撮影していく事が可能となった。つまり非常に贅沢な事に、それぞれに合わせた最適な場所でロケが出来た。」と語ると、

会場からは感嘆の声が上がった。

続いて話が「100年前の世界」を映像化する事の苦労に及ぶと、CGやVFXといった最新の映像技術が使われた制作秘話が明かされた。柴田氏は「日本に現存する100年前の建物というのは少ない。また蒸気船も、今の世界ではほとんど残っていない。という事はCG、VFXという最新技術で映像を作り上げなければならない。軍艦も全部は建てられないので、一部だけ再現し、奥に映っている部分をCGにする。特に難しいのは海で、波はCGの中で最も難しいものとされている。現代の船が実際に波を切る様子を撮影し、戦艦が走る水際の部分だけは、それを元にして作り上げる。戦艦と海の接触部分、その波を切るところだけは本当の映像で、徐々にCGを足していくといった処理を施した。」と説明した。これらの最新技術により、圧倒的なスケール感が生み出された映像について、西村氏は「日本の映像技術の最高水準が、このドラマに集結している。おこがましいが、出来上がったこの作品を、司馬遼太郎さんにも見て貰いたかった。」と語った。



『坂の上の雲』の時代から、日本はいわば「近代」に突入していく。藤本氏が「戦争というものをして、勝利をして狂喜して、また負けてしまって理性を取り戻す、この戦争というのはなんと不思議なものなんだろう」という司馬遼太郎の言葉を引用し「この事を、私たちがもっと考えていかなければならないのでは?」と問いかけると、竹下氏は「今の私たちは、近代化によって作られた豊かな生活と同時に、もたらされたリスクをも同時に経験している状況。」と続けた。柴田氏も「夢の原点であると同時に、その夢が行き着く先の、苦悩をも引き受ける事が始まった時代」とし「現代にも繋がる大きなテーマである。」と語った。最後に西村氏は「『坂の上の雲』というタイトルが非常に象徴的だと思う。坂を目指してきた明治の青年たちが、日本のピークから太平洋戦争に向かってどんどん転げ落ちていく。そこで一度、日本はどん底を経験する。しかし日本は、戦後の復興で再び坂を登り始めていく。司馬さんがこの『坂の上の雲』をお書きになったのは、ちょうどその頃。では、果たして今の我々は、坂のどの辺りにいるのか? 登り詰めたその先を降りようとしているのか? あるいはさらに登ろうとしているのか? この作品の最終的なテーマは、そこにあると思う、このドラマを作った。」と締めくくった。

■阪神・淡路大震災と関連番組を視聴する会を開催

1月10日から18日まで、ニュースパーク・シアターを会場に「テレビとラジオが伝えた大震災－放送ライブラリー保存番組でふり返る20年－」（番組を視聴する会）を実施した。（協力：日本新聞博物館）

発生から20年の節目に当たる阪神・淡路大震災。その体験を風化させることのないよう、放送ライブラリーの保存番組や公開番組の中から、阪神・淡路大震災をはじめとする震災に関連した10番組を紹介した。今回、紹介した10番組には次のラジオ2番組を含む。「阪神・淡路大震災から15年 ラジオが伝えたこと・そして、伝えること」（2010年ラジオ関西）、「防災ラジオ 私たちにできる事」（2012年RFラジオ日本）。期間中、会場の入口付近に当時発行された新聞の号外を展示したほか、放送ライブラリーで公開している震災関連番組の一覧を来場者に配布した。



来場者からは、「当時の番組を、大人になった現在、あらためて見ることができてよかった」、「震災発生の日に合わせたこと、号外を展示したことはよかった」、「地元テレビ神奈川の番組を取り上げた点がよかった」、「震災の教訓を忘れないためにも、こうした企画を続けてほしい」といった感想が寄せられた。来場者487人。

■岩合光昭写真展&上映会

2月27日～4月5日、岩合光昭写真展「どうぶつ家族」と特別上映会『岩合光昭の世界ネコ歩き』を同時開催した。



写真展会場では『世界ネコ歩き』でお馴染みの動物写真家・岩合光昭氏のライフワークとも言える野生動物の写真約120

展を展示。上映会場ではNHKの協力を得て、『岩合光昭の世界ネコ歩きmini』10作品を上映した。放送ライブラリーでも岩合光昭氏関連番組を4作品公開している。3月24日には岩合光昭氏のトークショーも開催した。

期間中多くの方が訪れ、展示・上映会場共、賑わった。「どうぶつ親子の愛情が伝わってきた。」「『世界ネコ歩き』は毎回BSで楽しみにしている。いつも心が和む。」など、たくさんの感想が寄せられた。期間中の入館者数は1万8千人を超えた（一日平均572人）。



■平成27年度事業計画・収支予算を決定

2月12日に第3回事業運営委員会を開催、平成27年度事業計画・収支予算を理事会に諮ることが了承された。2月27日開催の第2回理事会では、事業運営委員会報告が了承され、平成27年度事業計画・収支予算が承認された。平成27年度事業計画の概要は、次の通りである。

〔平成27年度事業・財政計画〕

ラジオ放送開始90年、戦後70年という節目を踏まえて、公開番組の増加を図ると共に、その活用を拡充するため、各地の公共施設や資料館などと提携して設置するサテライト・ライブラリーでの公開、大学での教育利用に資する授業での活用を推進する。

放送が果たしてきた社会的役割や放送番組の保存の意義に対する理解を促進する企画展示、番組上映会、公開セミナーなどのイベントを開催する。イベントは、横浜だけでなく地方でも開催し、放送ライブラリーの存在感を高める。

民放とNHKに対する出捐要請額は、平成24年に決定した「向こう5年間の事業方針」に基づいて、26年度比4,620万円を削減し、合計1億6,170万円とする。基本財産運用益は、26年度比2,460万円増加し、2億2,380万円に達する見込みであるが、これを維持しながら、民放とNHKに毎年出捐をお願いせざるを得ないという厳しい財政状況を踏まえ、さらなる経費削減に努める。

■第23回放送番組収集諮問委員会を開催

3月16日に第23回（平成26年度）放送番組収集諮問委員会を開催した。同委員会では、番組の収集・保存・公開状況、サテライト・ライブラリーと教育利用の進捗状況、放送ライブラリー事業の現況などについて報告。

その後、各委員から多くのご意見、ご提言を頂いた。特に、少人数の検討グループを設け、サテライト・ライブラリーや教育利用を積極的に推進するための具体案をまとめるべきとの提言があった。

■サテライト・ライブラリーと教育利用

放送ライブラリーの公開番組を、図書館など公共施設や大学の授業で活用していくため、25年度から試験運用を実施している。26年度の運用実績は以下の通り。

- ◇諫早市立諫早図書館「文人コーナー」に端末2台を設置し、市川森一脚本作品など計14本を個別視聴可能とした（11月29日～3月29日）。利用者241人。
- ◇市川市文学ミュージアム「水木洋子テレビドラマ上映会」（1月18日～3月17日のうち12日間）で24本を上映した。来場者703人。
- ◇東京大学教養学部「マス・メディア論」（情報学環丹羽美之准教授・受講生250人）の講義で9番組を活用。
- ◇長崎県立大学国際情報学部「映像研究」（村上雅通教授・受講生60人）で3番組を活用。講義中のほか講義前後での個別視聴も可能とした（283回視聴）。